

# Hyphen説明にむけて (I)

大賀 信孝

## 1 はじめに

hyphenというと

1.1 The sign <-> has several uses. It is used to

- (i) join words semantically or syntactically (as in *sister-in-law*, *good-natured*);
- (ii) indicate the division of a word at the end of a line;
- (iii) indicate a missing or implied element (as in *over-and under-payment*).<sup>(1)</sup>

という調子で、用法の面から解説されるケースがほとんどすべてである。だからhyphen解説は用法解説とっていいぐらいである。が、しかしそのようにhyphenは用法のみにスポットライトが当たっているにもかかわらず、奇異なことに、用法に関する統一規則といえるものはいまだ形作られていない。次の説明からそのことは分かる。

1.2 The rules about when to use a hyphen are not very exact.<sup>(2)</sup>

1.3 There is no rule for the use of hyphens in compounds. In case of doubt it is usually safe to write the words separately without a hyphen, but where possible the student should look the word up in a good dictionary.<sup>(3)</sup>

1.4 The reader of the last and other sections of this handbook cannot fail to have been struck by a lack of consistency in the use of HYPHENS in the writing of compounds. This lack of consistency is entirely in keeping with English practice....<sup>(4)</sup>

1.5 A note on hyphens

There are no precise rules, so the followings are brief guidelines:....<sup>(5)</sup>

さて以上のようにhyphen使用に関する統一規則はないのであるが、しかしこれも無理からぬところがある。というのも大部分のhyphenの用法はwriterに共通しているにもかかわらず、残りの少しの部分で各writerがhyphenを各人各様に用いることにより、hyphenの用法に差異またはバラエティが生じ、結果こうした個人的用法をすべてカバーする規則は作り出せないからである。

hyphenの用法というものにはこのようなところがある。いってみればhyphenの用法には不確定要因が含まれているのである。そのためhyphenの用法は異なる時期で異なる様態を呈することもありうるわけで、時期、時期に応じた綿密な調査・分析が要求されるのである。そこで今回は1993年～2001年の期間の資料を基にして、そうした不確定要素をはらむhyphenとはどういうものか、調査を——用法の視点からだけでは不十分なので、複数の視点から——実施しようとする。

なおその際調査項目としては

[hyphenの性質]

[hyphenが担っている役割]

[hyphenの用法]

の三つを設け、各項目で詳細に論述するようにするが、この論文ではまず[hyphenの性質]と[hyphenが担っている役割]の二項を論ずることにする。

## 2 hyphenの性質

文法と主体性・非主体性という問題は切り離してしまうことはできない。品詞について考察するとそのことは明らかなので、verbとnounを例に引いて証明することにする。

まず最初verbである。さてこのverbだが、これについて定義は以下のようにになっている。

2.1 Verbs can express actions or states.<sup>(6)</sup>

2.2 Verbs inflect, and can show contrasts of aspect, number, person, mood, tense, and voice.<sup>(7)</sup>

次にnounである。このnounについて定義は以下のようにになっている。

2.3 A word that belongs to the WORD CLASS that inflects for plural, that can

function as subject or object in a sentence, can be preceded by articles and adjectives, and can be the object of a preposition.<sup>(8)</sup>

- 2.4 The noun can work as the subject, object, or complement of a finite verb or verbal.<sup>(9)</sup>

このような具合である。さてこれらの定義についてであるが、これらにおいてverbとnounの機能を説明する動詞の形態が能動態であり、さらに“can”により能動性が強調されていることで、verbとnounは主体的性質を有しているということが分かる。

以上でverbとnounが主体性を保持しているという点は明らかである。では一方、verbなどと同じく文法領域に含まれるhyphenについてはどうであろうか。verb, nounの場合と同様に、結論を導くため定義に注目すると、hyphenの定義としては次のようなものがある。

- 2.5 ...a short stroke (-) used to connect the parts of a compound word or the parts of a word divided for any purpose.<sup>(10)</sup>
- 2.6 A hyphen is used to indicate the following:
- (1) Words compounded of two or more words to represent a single idea.
  - (2) The division of a word into syllables.
  - (3) The division of a word at the end of a line.<sup>(11)</sup>
- 2.7 The hyphen (-) is the small bar found on every keyboard. It has several related uses; in every case, it is used to show that what it is attached to does not make up a complete word by itself.<sup>(12)</sup>
- 2.8 The hyphen is used to make a compound word out of two or more words that are intended to be read as a single unit.<sup>(13)</sup>
- 2.9 When two or more words are combined to form a compound adjective, a hyphen is usually required.<sup>(14)</sup>
- 2.10 Hyphens (-) can serve to link the parts of a compound.<sup>(15)</sup>
- 2.11 ...a short written or printed line (-) which can join words or SYLLABLES:....<sup>(16)</sup>
- 2.12 ...a short written or printed line (-) which joins words or SYLLABLES:....<sup>(17)</sup>

さて上記の引用は正しい判断を下すのに足りるように、引用例数を少し多めにしたが、上記引用では対照的なところは理解いただけと思う。つまり2.5, 2.6, 2.7, 2.8, 2.9, におけるhyphenの定義では、受身的な意味を持つ過去分詞または受動態が用いられ、“used”, “is used”, “is used”, “is used”, “is required”がその具体的な形態である。が、一方2.10, 2.11, 2.12においては異なって能動態が用いられ、“can serve”, “can join”, “joins”がその具体的な形態である。

そのため形態の違いから判断すれば、2.5, 2.6, 2.7, 2.8, 2.9のhyphenの定義よりhyphenに主体性はなく、2.10, 2.11, 2.12の定義よりhyphenに主体性があるということになる。確かに形態で判断するかぎりではそうである。でも実はこうした判断はあやしいのである。というのも、2.10の場合、確かに能動態であってもそれが本当に主体性があることの証明になるのかという疑問と、同じ*Longman Dictionary of Contemporary English*でも1991年版=2.11と1995年版=2.12とでは何故、どのような意図で食い違いが生じたのか、主体性・非主体性云々と関連があるのではないかという疑問が生じるからである。

そこで2.10, 2.11, 2.12を精査する必要がでてきたので詳しく調べてみることにする。まず2.10である。さてこの2.10であるが、前述したように形態からは主体性があるようにみえる。でも定義中の“can serve to link the parts of a compound”という箇所には留意しなくてはならない。この箇所は“can link the parts of a compound”とはなっていないのである。このことより両者を比較していえることは、後者だとhyphenが主体的に行為におよぶことを示すけれども、前者ではhyphenはhelper的な存在で、動詞の形態は能動態であるにもかかわらず、hyphenは主体的な行為にはおよばないことを示すのである。つまり能動態は主体性を有することを意味する、という関係はここでは成立しないのである。結果、2.10の定義によると、hyphenには主体性はなくそれは非主体性を有するということになる。

次は2.11, 2.12についてである。まず2.11についていえば、“can join”という動詞の形態からhyphenには主体性があることが明確に示されている。他の文法書等を見ると実はこのように明確にhyphenの主体性を主張しているものはないので、これは唯一hyphenの主体性を主張しているものといっている。筆者も最初この定義を見た折、独創的な見解だと感じた。でもその後1995年版の訂正された定義2.12を見て、首をかしげることとなった。何故“can”は消えたのであろうか。疑問がわいた。そこで他のhyphenに関する定義との比較をじっくり行った結果、はっきりとしたある意図で“can”は削除されたのだという考えに到達した。

つまり*Longman Dictionary of Contemporary English*は1991年版ではなんとか孤

高を保ったが、1995年版では圧倒的に優位な反勢力——hyphenに主体性を認めない勢力——に気圧され、孤高を保ってhyphenに主体性を認めることはもはや出来なくなったのである。結果、他者の見解と歩調を合わすべく、“can”を削除したと想像できる。さてこのように“can”の削除について筆者は推測するのであるが、しかし“can”は削除されることにより結果は狙いどおり——主体性除去——になったであろうか。否である。主体性は動詞の形態からは否定されていない。つまり“joins”が存在するから形態的には主体性有りという感じになるのだが、でもこの辞書の意図はそれとは異なっているように思う。つまり“The hyphen joins two or three words into a single entity:....”<sup>(18)</sup>と述べてもhyphenの主体性を主張しないのと同様、この辞書は“joins”を用いてもhyphenに主体性ありと主張はしていないと考えられる。そのため一応辞書の意図を推測して2.12はhyphenの主体性を主張してはいないということにする。

以上のような。さてこのように、2.5から2.12までhyphenに関する8種類の定義を紹介しその内容を調べてきたが、hyphenに主体性有りとする定義——2.11の定義はすでに否定されているものと考えて——は発見できなかった。それゆえhyphenの有する性質は非主体性であるといえる。

### 3 hyphenが担っている役割

#### (a) 語形成

語の中には消え去っていくものもあれば、新しく生みだされるものもある。そうした両方の場合のうち、語を新しく生みだす方で貢献しているのがhyphenである。たとえば次の三つの文を見ていただきたい。

3.1 Indeed, the country has led the way in seeking E.C.-wide quotas to block imported television programs.<sup>(19)</sup>

(*Time*, September 27, 1993) (p.35)

3.2 Western governments will also be tested because the poppy-eradication project is going to cost at least \$25 million a year for 10 years in Afghanistan.

(*International Herald Tribune*, December 1, 1997) (p.7)

3.3 Yet, notes Mr Ferraz, less-than-whole-hearted support for privatisation is common around the world, and has rarely stopped it happening.

(*The Economist*, June 15, 1996) (p.42)

これらの中には“E.C.-wide”, “poppy-eradication”, “less-than-whole-hearted”という三つの複合語がある。最初のもは単語と接尾辞がhyphenで繋がってできており、二番目のものは単語と単語がhyphenで繋がってできており、三番目のものは四つの単語がhyphenで繋がってできている。そして品詞的な視点より付言すれば、これらの複合語はすべて文中で形容詞として働いている。三つの複合語に少し説明を加えればこのようになる。

さてこうした三つの複合語であるが、これらはすべて辞書に複合語として採録されておらず、それぞれ上記の文中においてのみ使用される可能性が高い。つまり“temporary compound”<sup>(20)</sup>である可能性が高い。hyphenで繋がってできるcompoundにはまづこうした種類のものが存在する。

次にこうしたものとは異なって、使用回数がかなりの数に上り辞書に採録されているcompoundについてである。ところで辞書を見るとそうしたものは多数存在する。そうした中、例として二つ引用すると次のようなものがある。

- 3.4 His argument is that because his career has been a stop-go affair he still has plenty left.

(*The Guardian Weekly*, February 7, 2001) (p.32)

- 3.5 As I have already mentioned we have expanded many laws which takes the government out of out-of-pocket investments, because the private sector can finally be contracted to put in the investments themselves...

(*Asian Business Review*, August, 1995) (p.41)

上記の引用文中では、“stop-go”と“out-of-pocket”がつまりその辞書に採録されている複合語なのである。これらはhyphen付き複合語とはいっても使用回数が多いだけに、言ってみればcliché化している。そのため3.1, 3.2, 3.3の場合の複合語とは性質的に異なるが、こうした種類のcompoundも存在する。

以上のような。このようにhyphenは2種類の性質の異なる複合語を結果的に生み出している。でもしかしいづれにせよ、語形成には役立っているのである。

#### (b) 語形変化の過程形成

hyphenが語形成に関与することについてはすでに述べたが、hyphenが貢献することで生まれるhyphen付き複合語は実は語形変化の一過程を示すともいわれている。つまり語形変化の全過程は次のようであり、

- 3.6 The usual sequence is for the words to be written separate at first, then to become hyphenated, and finally to be written solid.<sup>(21)</sup>

最初の過程はopen形式の複合語で、二番目の過程がhyphen付き複合語で、最後がsolid形式の複合語<sup>(22)</sup>だというのである。具体的な例で示せば

- 3.7 And because the flat tax is akin to a consumption tax, there could be increased incentive for workers to save.

(*U.S. News & World Report*, January 15, 1996) (p.38)

- 3.8 All but one of the division's 16 highest-ranking women work in logistics, supply and personnel, all traditional areas for women.

(*The Guardian Weekly*, February 8, 1998) (p.17)

- 3.9 In the last lap of that campaign, it now seems clear, the drab and polluted city long associated with ostrichlike politics has a better than sporting chance.

(*Time*, September 27, 1993) (p.24)

以上のように、3.7で示している“flat tax, consumption tax”は最初の過程の複合語で、3.8で示している“highest-ranking”は二番目の過程の複合語で、3.9で示している“ostlichlike”が最終過程の複合語ということになる。

さてこのように語形には変化があるということだが、こうした主張は例外はあるにせよ承認されている。つまり

- 3.10 This evolutionary process, however, is not consistent; some hyphenated compounds make it to respectability and some don't:

SEPARATE WORDS	HYPHENATED COMPOUND	UNIFIED COMPOUND
<i>son in law</i>	<i>son-in-law</i>	( <i>unlikely</i> )
<i>book seller</i>	<i>book-seller</i>	<i>bookseller</i>
<i>book keeper</i>	<i>book-keeper</i>	( <i>unlikely</i> )
<i>life like</i>	<i>life-like</i>	<i>lifelike</i> <sup>(23)</sup>

と述べられているように例外はあっても、大局的には“evolutionary process”は承認されているのである。そしてその“process”にhyphen付き複合語は組み込まれているのである。このことより複合語形成に参与しているhyphenは、視点を変えて考えると、語形変化の過程形成という面にも参与しているといえるのである。

### (c) 意味不明瞭防止

英語表現において意味が明確でないことは嫌われる。それは当然のことで、英文を読む側の人が英文を読んでも、その英文に意味があやふやなところがあると困惑させられるからである。そのようなわけで意味不明瞭は避けるべきことなのだが、ところでこうした意味不明瞭については原因が句レベルのところにあったり、語レベルのところにあたりする。そうした中、ここで述べようとするのは語レベルの意味不明瞭に関連している。つまりhyphenは複合語に関連して、その意味不明瞭を防止するばかりでなく、意味を明瞭にすることに役立っていると述べたいのである。

さてそこで、そのことの証明のためにまずhyphenの用法に関する説明を引用すると、

- 3.11 The principal uses of the hyphen in English are to join two or more words together, either as a fixed compound or to avoid ambiguity, and to indicate that a word has been broken at the end of a line through lack of space.<sup>(24)</sup>
- 3.12 The hyphen is used to eliminate ambiguities or misreadings which occasionally result from the addition of a prefix.  
re-press re-call re-sign<sup>(25)</sup>
- 3.13 Hyphens should always be used in words which, unhyphenated, would be ambiguous (*re-form, re-sign, re-cover*) or ugly (*full-length, semi-invalid*).<sup>(26)</sup>

以上のような具合である。

ところでここでは三つの引用を行ったが、これらの用法の説明ではっきりしていることがある。それは意味不明瞭——ambiguity——防止にhyphenが貢献していることへの言及である。このことは三つの引用に共通しており、これより説の面では、hyphenに意味不明瞭防止機能有りは証明されているのが分かる。次は実証で、そのために必要な実例を示せば以下のようなものがある。



- 3.14 A few months ago a group of young Roman Catholics asked the Archbishop of Paris, Cardinal Jean-Marie Lustiger: “How can we re-create the spiritual meaning of Lent ? How can our action as believers be made visible in everyday life ?”  
(*The Guardian Weekly*, February 7, 2001) (p.26)
- 3.15 The Americans were not the only would-be exorcists in this final.  
(*International Herald Tribune*, December 1, 1997) (p.28)
- 3.16 But behind the nuts-and-bolts economic issues, French farmers are raising fundamental questions about the future of European culture and society.  
(*Time*, September 27, 1993) (pp.34-35)
- 3.17 Bob Tricker said the consortium MBA is very much closer to the world of business, but the wide range of companies participating ensures the program avoids the narrowness for which in-house management programs are often criticized.  
(*Asian Business Review*, August, 1995) (p.75)
- 3.18 Over-the-counter drugs are expected to be a main growth area to the end of the decade, fuelled by the increasing disposable income of Chinese consumers and their greater exposure to foreign drugs which are not available from the state healthcare scheme.  
(*Asian Business Review*, August 1995) (p.85)

さてこれら実例であるが、これらに説明を加えると次のようである。つまり3.14では“re-create”は「作り直す」と「休養させる」の意味のうちいずれの意味か分からずというのではなく、hyphenを使用することで「作り直す」の意味で用いられていることを示している。同様に3.15では「自称の」と「～であろう」の意味のうち、“would-be”はhyphen使用により「自称の」の意味で用いられていることを示し、3.16では「基本」と「ナットとボルト」の意味のうち“nuts-and-bolts”は、hyphen使用により「基本」の意味で用いられていることを示し、3.17では「組織内の」と「家の中で」という意味のうち“in-house”は、hyphen使用により「組織内の」という意味で用いられていることを示し、3.18では「店頭販売の」と「カウンター越しに」という意味のうち“over-the-counter”は、hyphen使用により「店頭販売の」という意味で用いられていることを示している。このように二つの意味があって本来なら曖昧にな

るところを、hyphenを使用することにより曖昧さが除去されているのである。

(d) 文の短縮化

“One way that the language is changing is towards having shorter sentences and more full stops.”<sup>(27)</sup>と述べられているが、複合語の使用状況を見ていると確かにこのことを実感する。つまりhyphen使用により出来上がっている三つ以上の語より成る複合語を観察すると、主語等の省略で複合語が生まれ、結局これが文の短縮に繋がっているのが分かるのである。なおそうしたものの実例を挙げると次のようなものがある。

- 3.19 The company operates a 116-megawatt power plant under a 10-year build-own-operate-transfer (BOOT) arrangement and a 28-megawatt thermal plant originally used by the US navy for a commitment of US\$150 million.

(*Asian Business Review*, August 1995) (p.38)

- 3.20 But a lack of transparency in financial dealings, a failure of regulation and disinterested government supervision of markets, and a get-filthy-rich-quick mentality within the national elite were evident in each case.

(*International Herald Tribune*, December 1, 1997) (p.8)

- 3.21 The relentless, full-speed-ahead opening of markets around the world portrayed by President Bill Clinton and others as the key to economic growth in the 21st century has suddenly been shown to have an identifiable downside, as well as benefit.

(*International Herald Tribune*, December 1, 1997) (p.8)

- 3.22 Through the years, the only memory the Power family had of their daughter was yellowing newspaper clips they had sorrowfully added to a family album the day their daughter-turned-radical robbed a bank.

(*Time*, September 27, 1993) (p.30)

- 3.23 Affirmative action will be pushed into the spotlight by a California ballot initiative which aims to ban racial or gender preferences in state contracts; this goes against Mr Clinton's "mend-don't-end" position.

(*The Economist*, June 15, 1996) (p.30)

つまり上記例を具体的に説明すると、3.19では省略なしの場合には、“The company builds, owns, operates and transfers a 116-megawatt power plant.”となるが、これを省略し“build-own-operate-transfer”と複合語にすることで文の短縮になっているし、3.20では省略なしの場合には、“The national elite get filthy rich quick.”となるが、これを省略し“get-filthy-rich-quick”と複合語にすることで文の短縮になっているし、3.21では省略なしの場合には“going ahead at full speed”となるが、これを省略し“full-speed-ahead”と複合語にすることで文の短縮になっているし、3.22では省略なしの場合には、“...daughter who turned radical...”となるが、これを省略し“daughter-turned-radical”と複合語にすることで文の短縮になっているし、3.23では省略なしの場合には“Mend but don't end the affirmative action.”となるが、これを省略し“mend-don't-end”と複合語にすることで文の短縮になっている。以上のようなことより、複合語の形成に係るhyphenが結局文の短縮化に貢献していることが分かる。

## Notes

- (1) Sylvia Chalker, *The Little Oxford Dictionary of English Grammar* (Oxford University Press, 1998) 108.
- (2) John Eastwood, *Oxford Guide to English Grammar* (Oxford University Press, 1994) 73.
- (3) A. J. Thomson and A. V. Martinet, *Oxford Pocket English Grammar* (Oxford University Press, 1990) 17.
- (4) R. W. Zandvoort, *A Handbook of English Grammar*, 7th ed. (Maruzen, 1975) 288.
- (5) L. G. Alexander, *Longman English Grammar* (Longman, 1988) 37.
- (6) Eastwood *Oxford Guide* 79.
- (7) Chalker *The Little Oxford Dictionary* 248.
- (8) Chalker *The Little Oxford Dictionary* 150.
- (9) V. F. Hopper, C. Gale, and R. C. Foote, *A Pocket Guide to Correct Grammar*, 3rd ed. (Barron's Educational Series, Inc., 1997) 6.
- (10) *The Budget Macquarie Dictionary*, 3rd ed. (Macquarie Library, 1998) 199.
- (11) Margaret Shertzer, *The Elements of Grammar* (Collier Books, 1986) 109.
- (12) R. L. Trask, *The Penguin Guide to Punctuation* (Penguin Books, 1997) 59.
- (13) V. F. Hopper, C. Gale, and R. C. Foote *A Pocket Guide* 149.
- (14) W. Strunk Jr., and E. B. White, *The Elements of Style*, 3rd ed. (Allyn and Bacon, 1979) 34-35.
- (15) JRL Bernard, ed., *Macquarie Writer's Friend* (The Macquarie Library, 1999) 107.
- (16) *Longman Dictionary of Contemporary English*, new ed. (Longman, 1991) 626.
- (17) *Longman Dictionary of Contemporary English*, 3rd ed. (Longman, 1995) 702.
- (18) B. A. Phythian, *Teach Yourself Correct English*, rev. A. Rowe (Teach Yourself Books, 2000) 42.
- (19) 筆者はこれまで過去7年あまりにわたって、個々の新聞・雑誌をsourceにしてhyphenについて論じてき

た。今回のこの論文ではその総決算として、hyphenの全体像を——その使用法を含めて——描こうと考えた。そのため使用するsourceの範囲を広げて以下のものとして、

*Time*, September 27, 1993 / *The Bulletin*, May 3, 1994 / *Asian Business Review*, August, 1995 / *U.S. News & World Report*, January 15, 1996 / *The Economist*, June 15, 1996 / *International Herald Tribune*, December 1, 1997 / *Far Eastern Economic Review*, December 11, 1997 / *The Guardian Weekly*, February 8, 1998 / *The Guardian Weekly*, May 2, 1999 / *The Guardian Weekly*, February 7, 2001

これらの新聞・雑誌中のhyphen付き複合語約4000を引用の対象とした。

- (20) M. A. DeVries, *The Encyclopedic Dictionary of Style and Usage* (Berkley Books, 1999) 199.
- (21) Margaret Shertzer, *The Elements* 109.
- (22) Cf. *Merriam-Webster's Guide to Punctuation and Style* (Merriam-Webster, 1995) 112.
- (23) Graham King, *Collins Wordpower Punctuation* (HarperCollins, 2000) 98.
- (24) M. H. Manser, ed., *Good Word Guide* (Bloomsbury, 1997) 130.
- (25) V. F. Hopper, C. Gale, and R. C. Foote *A Pocket Guide* 150.
- (26) B. A. Phythian, *Teach Yourself* 32.
- (27) Philip Howard, *The State of the Language* (Penguin Books, 1986) 162.

#### References

- Augarde T. *Oxford Word Challenge*. Oxford University Press, 1998.
- Blamires H. *The Penguin Guide to Plain English*. Penguin Books, 2000.
- Bryson B. *Mother Tongue*. Penguin Books, 1990.
- Chambers Guide to Effective Grammar*. Chambers, 1999.
- The Chicago Manual of Style*. 14th ed. The University of Chicago Press, 1993.
- Collins COBUILD English Grammar*. Collins, 1990.
- Collins COBUILD English Guides: 2 Word Formation*. HarperCollins, 1991.
- Collins COBUILD English Usage*. HarperCollins, 1992.
- Crystal D. *The English Language*. Penguin Books, 1990.
- Fergusson R. and Manser M. H. *The Macmillan Guide to English Grammar*. Macmillan, 1998.
- Gibaldi J. *MLA Handbook for Writers of Research Papers*. 5th ed. The Modern Language Association of America, 1999.
- Greenbaum S., and Quirk R. *A Student's Grammar of the English Language*. Longman 1990.
- Greenbaum S. *The Oxford English Grammar*. Oxford University Press, 1996.
- Hicks W. *English for Journalists*. 2nd ed. Routledge, 1993.
- Haslem J. A. Jr. ed. *Webster's New World Pocket Style Guide*. Macmillan, 1997.
- Huddleston R. *English Grammar: an outline*. Cambridge University Press, 1988.
- Jackson H., and Amvela Z. E. *Words, Meaning and Vocabulary*. Cassell, 2000.
- Jarvie G. *Grammar Guide*. Bloomsbury, 1993.
- Leech G. *An A-Z of English Grammar and Usage*. Nelson, 1989.
- Leech G. *Introducing English Grammar*. Penguin English, 1992.
- Matthews P. H. *Oxford Concise Dictionary of Linguistics*. Oxford University Press, 1997.
- The Princeton Language Institute. ed. *21st Century Grammar Handbook*. Laurel, 1993.

Hyphen<sup>解</sup>明にむけて (I)

Reah D. *The Language of Newspapers*. Routledge, 1998.

Swan M. *Basic English Usage*. Oxford University Press, 1984.

Swan M. *Practical English Usage*. 2nd ed. Oxford University Press, 1995.

Waterhouse K. *English Our English*. Penguin Books, 1994.